
暗鬼夜行

保健 室乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗鬼夜行

【Nコード】

N0064B

【作者名】

保健 室乃

【あらすじ】

Kは、人里離れた北陸の村より一通の手紙を預かり、そこへ鬼退治に赴く。

生き血を啜る、贖罪の子は踊れ 1

Kは村に到着すると、まず宿を探した。

村はほとんどが昨晚降った大量の雪に覆われ、川の水は雪解けの水も相まって勢いよく橋の下を流れている。Kはそこでしばらく迷った末に顔を洗い、服の袖で水滴を拭った。冷たいというにはいささか過ぎる川の水だった。橋の先には軒の繋がった長屋が道を狭めるように並んでおり、その先は月の光の弱いせいで見渡すことはかなわなかった。

Kは歩を進めた。村は寝静まり、長屋の障子はひとつとして灯っていない。みんな寝てしまっているのだろうとKは思った。自分が来ることは村の人間に伝えてはいなかったし、誰も準備するような人間は端からいなくて当たり前なのだ。もつとも、こちらにだってゆとりはなかった。今日明日に飢え死んでしまうほど、Kには金が無かったのだ。

金の入ったあとのことを考えると喉がうずくのを感じ、Kはなおのこと歩を進めた。一帯の寒さは厳しく、見渡す限りがその透明度を増していた。行けども行けども宿のようなものは見当たらなかったが、一軒だけ火の灯っている軒をKは目にする事ができた。表札のようなものはかかっておらず、割りに大きい家だった。

少なくとも貧乏なうちではない、Kはこう考えると、玄関の戸を二度叩いた。時間は午前2時か3時のようだった。寝ているのなら叩き起こしてしまえばいい、Kはふたたびこう考え、もう二度ほど玄関の戸を叩いた。なに、おれは村の救世主となるはずなのだ。村の人間のひとりやふたり叩き起こしたところで、何か問題のあるわけがない。

戸の前に立ったKに、臆するような面はまるでなく、知らぬ人物の戸は延々叩かれ続けた。そのうちKは寒さにこらえ切れず、内の人に「おうい」と声をかけた。そんなことをしばらく続けているう

ちに、近所の家の障子や二階の窓から明かりが灯った。Kはなお臆することなく戸を叩いた。誰かがうちの中から「うるせえ」と怒鳴り、また他の家からは「やめてくれ」と哀願するような声が響き渡った。Kはそれらを耳に入れながらも、なお戸を叩き続けた。内の主と思われる初老の男が出てきた時にはすでに四軒先の家からも明かりが灯っていた。

「なんですか」と、戸を少し開けて男が言った。老人の目には警戒の光が沈んでおり、またそれに抗うような震えもあった。

「私は頼まれてここへ来た者です」と、Kは言った。「あなた方から授かった手紙もここへあります。餓鬼に因った手紙です。なんならここで読み上げて差し上げましょうか」

「いえ、けっこうです」と、老人は言った。「そうですか、それなら合点の行くところです。しかしこのような夜更けにお越しになるとは聞いていなかったものですから」

「それはわかっています。ただ私にはそうするしか方法がなかったのです。私は忙しい身ですし、年がら年中しがらみに囚われています。問題のあるのはこの村だけではありませんからね。そのところは省いてもよろしいですか」

「ええ、けっこうですとも」老人は納得したように頷いてみせ、警戒の光を解いた。「ささ、お上がりください。私はこの村を代表するものでございます」

「けっこう」と、言ってKは村長のうちへ上がりこんだ。救われた気持ちだった。

生き血を嚙る、贖罪の子は踊れ 2

村長は火鉢のある座間へ腰を下ろすと、夫人を呼んで熱い茶を持つてくるようにと頼んだ。その気づかいはKにとつてもまったくありがたいものだった。手の平にほとんど感覚はなかったし、何より飲み物が欲しかったのだ。Kは村長が火鉢に種火を投げ込むと、そこへ両手を突き出してしばらく黙った。また、村長もKが何か話し出すのを待っている風だった。

「今晚はここへ泊まらせてもらうことになるでしょう」と、Kは言った。「茶を飲み終えたらすぐに寢床へつきます。いいですね」

「もちろんです」と、村長は言った。

「それから明日の晩には助手を二人ほどつけてください。私の仕事にはどうしたって助手がいります。それも有能な助手でなければなりません。背丈のある青年二人がいいでしょう。この村に有能な人間はいますかな」

「もちろんおります」

「夜には酌をしてくれる娘をこちらへ寄越して下さい。若い娘がいいでしょう。それと酒です、わかりますね」

「わかりました」老人はなされるがままに頷いた。

夫人の手によって茶が出されると、Kはゆっくり喉元へ流し込んだ。臍に染み渡ると思った茶はこれが生まれて初めてであった。村長が火箸で鉢を掘り返しているのを見ると、Kは早くも眠気が身に到来していることを悟った。彼はおもむろに立ち上がってうちの中を見渡し、村長にあれこれとうちにあるものの由来を訊いた。

「まずそれはなんですか　なるほど鹿の頭ですか。なに、暗くて多少目が利かぬものですから。それからそっちは何でしょう、置き物か何かですか」

「それは靈魂を鎮めるためのものです」と、村長が説明した。「この地方ではかかせぬもののひとつです。木の幹の部分を人の形に

削りまして、それに鶏の血を注ぎます。黒ずんでいるのはそのためです」

「またどうしてそんな残虐な真似をしなくてはならなかったんでしょうね」

「さあそれはわたくしにも存じ上げませんな」と、村長はふたたびいくらか警戒の色を浮かべた。

「まあそれはいいでしょう。しかし私がこの家に厄介になるあいだだけは是非ともそのようなものを飾っておいて欲しくはありませんね。できれば物置にでも据えておいてください。私はそろそろ眠るので、そのあとになさるといいでしょう」

Kはそう言うと、村長に向かって案内してくれとばかりに顎をしゃくつた。村長は火箸を置くと立ち上がり、それから廊下の奥へ指を差した。「案内していただけないのですか」と、Kが言うと、村長は腕を下ろして廊下の奥へと歩み出した。Kもそれについていった。

部屋は六畳ほどの何もないさっぱりとした部屋で、布団が隅に畳んで置かれていた。村長は障子を開けるとKを招きいれ、両手を叩いて夫人をその場へ呼んだ。夫人は血色の悪い顔をして、思わぬ客人に舞い上がったのかいそいそと歩き、夫に命令されると襖から掛け布団を取り出して、伸ばした布団にそっとかぶせた。

「当座はこの部屋でお願いできますでしょうか」と、村長は言った。

「いいとしましょう」と、Kは言い、障子を閉めて村長とのあいだを隔てた。

生き血を嚙る、贖罪の子は踊れ 3

明け方になると、強張った雪が村を白く染めていた。Kは窓から用心深く村を観察して、静かに深呼吸をした。それほど大きな村ではもちろんない。四方を山と田園に囲まれた穏やかな村だ。村民がまだ誰も起きていないことを知ると、Kは自分が意外にも早い時間に目覚めてしまったことに気づいた。Kはその場でひとつ咳払いをすると、脱ぎ捨てたぼろの懷を探り、煙草を一本吸った。

腹はまだ減っていなかった。うずくのは酒を求める喉のみである。Kは煙草を吸い終わると吸い殻を雪面に放り投げ、それから布団の上へ胡坐を掻いた。手を叩いて村長を呼んでみようととも考えたが、休める時には休んだ方がいい。なににせよ、雪道では骨が折れる。

Kは夫妻が目覚めるまで布団の上で胡坐を掻き、目をつむって酒を頭の中から払おうとした。

それから一時間もしないうちに村長はKの部屋の襖から声をかけた。

「ただ今お食事をご用意いたします」

果たして村長がKの目覚めていることを知っていたかどうかは定かでないが、村長は手を叩くと夫人を呼び、台所へ行って茶を持ってくるようにと頼んだ。従順な夫人はまた昨日のようにいそいそと歩き、台所へ立って薬缶に火を入れた。村長はそのあいだも、Kの自室の襖へ立って、静かに夫人を待っていた。しかしそれは、息を潜めてKの様子を窺っているようでもあった。

「先生」

村長がこう呼んだのをきっかけに、Kは目を開けた。

「なんですか」と、Kが答えた。

「昨晚はよくお眠りになりましたでしょうか」

「あまり眠れませんでしたな」

「そうですか。朝食を召し上がりましたらその後は助手をお呼び

いたします。それまでお部屋でお待ちください」

「私についてはかまわなくてけっこう」と、いくらか不機嫌そうにKは言った。「村のことをまだまるで知りませんし、そうそう閉じこもっているわけにも行きません。私の仕事は非常に複雑で厄介なものです。よって誰の指図も受けることはできません。私の好きなようにやらせてもらいます」

村長はそれについてどんな意見も持たなかった。襖から去ると村長は夫人にお茶を催促した。

朝食を自室で食べ終えたKはそのまま部屋の中で煙草を吸い、ふたたび瞑想じみた儀式に戻った。Kも当面は村長の言いつけを守っておくことにした。助手達が一体いつ来るのかも定かではなかったし、また外に出て体が冷えてしまえば、どうしても酒を飲みたくなるだろう。Kはやがて、自分の道具の手入れを始めた。長ドスに磨きをかけ、手ごろな布で鏡と数珠を磨いた。ひととおりそれらを終わると、また瞑想に入った。

今家に誰がいて、誰がいないのか、はつきりとはしなかったが、玄関の戸を引くような音が度々Kの耳に入った。今ごろ村長が助手を探しに回っているのかもしれないとKは思った。そしてその予感に当たっていた。ばたばたと玄関の方がうるさくなったと思うと、Kの自室の方へ何人かの足音が聞こえた。Kは用心のために長ドスを腰の後ろへ回し、腕を組んで襖を前にした。先生、と村長が声をかけると、Kは中へ入るように言った。

生き血を嚙る、贖罪の子は踊れ 4

助手の二人はKよりも一回りほど若く、体格もそれなりによかった。二人は村長を挟んで座り、ずっと頭を下げていた。村長がひとつ咳払いをすると、場のひどく締まったような感があつた。

「先生、これが助手にございます」と、村長は言った。

Kは黙ったまま腕組みをして、二人の助手をじっと眺めた。

「……まあいいでしょう。では村長はもう下がってください」

村長は言われるまま立ち上がり、障子をしめる前に一度だけKと目を合わせた。それから助手の二人を少し心配そうに眺め、ゆつくりと戸を閉めた。助手の二人はなお正座のまま膝に両手を置いて頭を下げていたが、Kが顔を上げるように指示するとゆつくりと頭を上げた。

二人は多少怯えた目をしながらKを見やると、それきりまた目を伏せてしまった。Kはここでひとつ咳払いをした。

「お前達」と、Kはなるべく優しくに言った。「お前達は今日から俺の助手になるんだ。それは一心同体を表すんだぞ。なにもそうかしこまることはない。もっと肩の力を抜いていいんだ。どれ、俺にもっと顔を見せてごらん」

するとひとりの助手が顔を上げ、Kと目を合わせた。まだ少年のような目をした垢抜けない青年であつた。彼はKとしばらく目を合わせたのちに、隣の青年が顔を上げていないことに気づいて、肘で軽く小突いた。隣の青年は体をびくと動かし、それからゆつくりと顔を上げた。

「お前達には今日は村の案内をしてもらつ」と、Kが言った。「おい、この村はどのくらい広いんだ」

「軒が四十ほどあつて、みんなそれぞれに畑を持っています」

少年のような目をした青年がそう言うのと、Kは「ふむ」と、自分のアゴをさすった。Kのアゴは北陸までの旅路ですっかりと伸び、

指は黒ひげに隠れて助手たちからは見る事ができなかった。

そのころ、Kはこの助手二人の果たしてどちらが優秀なのかを見極めようと躍起になっていた。好感が持てるのは断然、少年のような目をした青年の方だった。だが初見ではわからぬことが多いことを、Kはよく知っていた。Kがそれぞれの名前を訊くと、少年の方は「又一」、もうひとりの助手は「長蔵」と答えた。Kは初めに助手達に言っておくべきことはいないか、と考えをめぐらせた。

「一心団体という意味がどういう意味かわかるか」と、だしぬけにKが言った。「又一、答えてみる」

「生きるも滅ぶも道連れということですね」

「違う。それだけじゃない」と、Kは首を振った。「いいか、俺達は義兄弟の契りを交わしたも同じなんだ。俺の助手につくということはそういうことなんだ。俺の助手についた時点でお前達はもう村の人間ではない。俺の所有物だ。だから俺の質問には全て答える義務がある。そしてお前達は俺がここにいるあいだ、村の人間とは一切口を利けない。親兄弟とも、だ。寝るときは俺の部屋で同じように寝る。もしこの誓いを破るようであれば、俺は即刻お前達を殺す」

助手の二人はKのこの言葉に面喰らい、怯えた目でK自身を見た。Kの方はと言うと、今にも二人に食いかかっていかんばかりに助手二人を睨みつけていた。助手の二人が当惑顔でお互いを見合すと、Kが一喝した。

「これを守れないならば即刻この場を立ち去れ。いいな」

Kがそう言うのと、長い沈黙が部屋に訪れた。助手達はお互いの顔を窺うことすらできず、下を向いてもじもと体を動かしていた。長蔵が正座を崩しかけたのを見ると、又一がまた肘で軽く小突いた。そのあいだもKは胡坐を搔いて二人を睨みつけたままである。しかし、この半ば脅しにも聞こえる言いつけには、Kなりの人心掌握術があった。初めに厳しい面を見せておけば後々になって助手達も言いつけを破ろうとはしないだろう。それに、いざという時は頼りに

なること実証できたに等しい。10分も沈黙が続くと、Kはゆつくり立ち上がった。

「お前達は自分で自分の人生の選択もできんのか」と、吐き捨てるようにKは言った。「悪いが俺はもう行くぞ。こんなところで油を売っている暇はないんでな。ただし、まだ俺の助手になりたいという人間がいるなら、そのまま立ち上がってついてこい。その人間はきっと男になれることだろう」

Kが障子を開けて廊下を歩いて行ってしまうと、助手の二人は焦ったような顔で互いを見合わせ、それから立ち上がってKのあとを追った。

生き血を嚼る、贖罪の子は踊れ 5

Kの言いつけどおり、居間に飾られていたあの薄気味の悪い人形は夜のうちどこかに隠されてしまっていた。Kは多少満足気にそれを見やると、あとは後ろから助手達の足音が聞こえるのを今か今かと待った。もし助手達の決心がつくのなら、それは早急であろうと見込んでいた。二人で何か話し込んでしまふようなら、それはもうおしまいだ。

Kが玄関で長ぐつに足を通したとき、助手二人はKの後ろに立った。Kは二人に背を向けながら、にやりと笑い、それからこう言った。

「お前達は賢いよ。さあ履物を履け。俺を案内するんだ」

村はKの目に全体的にみすばらしく映ったが、雪の白く染めていくせいで神妙な美しさも在った。Kは助手二人を自分の前に歩かせ、黙って一軒一軒を訪ね歩くように指示した。訪ね歩くといっても、家の戸を叩くわけではない。だから助手達もこれに少し困惑した。Kの意図をまったく掴み出せなかったからである。

「どれくらいには帰れる見込みだ」と、Kが助手に訊いた。

「午前様には終わると思います」と、又一が言った。

「なにせ人の少ねえもんな」

長蔵がそう言うのと、又一がたしなめるように肩をぶつけた。Kはその様子を二人の後方で伺いながら、煙草に火をつけるとあとは地面ばかりを見て歩いた。ひとまず助手共が自分にとって害のある人間ではないとわかったからである。Kは自分の仕事が人々の目にどんな風に映るかというのを、これまでの経験から嫌というほど悟っていた。一步間違えば俺自身も化け物に見なされかねない、Kはこう考えていた。

村には用水路がいくつも張り巡らされており、それは近くを流れ

る川から枝分けされているらしかった。では案内が終わったら今度はそこへ行こう、Kがこうい言くと、二人の助手はとんと黙ってしまった。ただ黙々と歩き続けるのみになってしまったのである。Kも当然これを不審に思い、おいと声をかけた。長蔵はあからさまに何かを隠している様子で、Kはさきの忠告をふたたび繰り返した。

「お前達には俺の質問に答える絶対義務があることを忘れたのか」これを聞いた二人は震え上がり、又一が言葉の口を切った。

「忘れてなどいけません。もちろん覚えていますとも。ただあそこは縁起が悪いんです。村の人間も誰も近寄りません」

「近寄らないと言ったってただの川じゃないか」と、Kは言った。「いいえ、それが違うんで」と、今度は長蔵が言った。「あそこは何でも水子の霊だかなんだかが出るってんで、恐れられてるんです」

又一もそうだという風に頷いた。

「お前達はどうしようもない愚図だな」と、Kが怒ったように言った。「お前達は俺を誰だと思っているんだ。俺はそれ専門の人間だぞ。たとえ鬼が出ようが蛇が出ようが、俺には何の問題もない。わかったらとつと案内するんだ」

二人はKの言葉に改めて驚かされたような顔を浮かべ、それから納得したらしく、足を川の方へ向けた。まだ軒は4軒ほどしか回っていないかったが、Kのこの言葉で必然的に目的先は変わってしまった。Kは一度かつかすると、助手二人の後ろ姿を見ているだけで蹴り飛ばしてやりたくなった。Kは一度どちらかをぶちのめさなければならぬような気さえしてきた。そうすることで威嚇を発生できるなら、こんなに簡単なことはない。しかしどちらを殴るにしても利点や損失は景色の端にちらちらと見えた。それからKは腹を立てながらも、ひとまずこの怒りが過ぎてしまふのを待つことにした。

生き血を嚙る、贖罪の子は踊れ 6

怒りに身を任せてしまうのは愚の骨頂だということをKはよくわかっていた。怒りは人を盲目にし、事の一点をさも大事そうに凝視させる。助手達は川べりが見えるとふたたびそわそわし始め、後ろへ振り向いてKの顔色をうかがった。Kはそれに動じず、ただ頑として助手二人を睨みつけた。

これで助手達ももう本格的に諦めたらしかった。言葉数さえ少なかったものの、足をまっすぐに川へ向けた。

三人が川につくと、まずKが川の水を手ですくって飲んだ。川の水は昨夜同様冷たく、雪解け水も相まって、見渡し限りが青く澄んでいた。Kは飲まないのか、と助手達に聞いたが、またKに脅しをかけられてはいけないとばかりに、助手達二人は黙って下を向いていた。するとKは、それはそれでいいという風に二人を見つめ、それから対岸を眺めた。

対岸には松の木がいくつかあり、どれも真つ白な雪をかぶっていた。Kはそれをしばらく眺めた後、助手に言った。

「それでなぜこの川が人々に忌み嫌われているんだ」

Kがこう言うと、又一だけが顔を上げた。又一はKと見つめ合った。

「全ての事情を知っているわけではありませんが」と、又一が言った。「水子というんで、たぶん誰かが身投げでもしたんだと思います」

「子を孕んだ女がか」

「はい。きっとそうでしょう」

Kはそれぎり黙ってしまうと、又一の顔をじっと見つめた。もしここで嘘を言うようなら、本当に一度ぶちのめしてやらなければいけない、とKは考えた。しかし、又一の表情に何かを隠しているよ

うな陰は見当たらなかった。

「よろしい」と、Kは言った。「では元の案内に戻れ」

全ての案内が終わるころには、もう日が頭の上を越し、時間になるところの1時か2時になっていた。助手達はまたぞろKに何か文句を言われるのではないかとびくびくしていたが、Kは何も言わなかった。Kの頭の中にあるのは、もうあの川のことだけだった。あの清らかに見える川の何が人々をそこまで恐れさせているか、見当もつかなかったからである。身投げくらい、都会ではそんなにめずらしいことでもない。しかし村となると話は別なのかもしれない。Kはこのような思案の行ったり来たりを繰り返したが、答えとなるようなものは顔を出さなかった。

そしてやはり、川と鬼が何か関係しているのかもしれないと思った。そうとしか考えられなかった。今日一日村を歩き回ったが、その川以外に何かめばしい発見もなかった。村長なら何かを知っているのだろう、とKは考えた。しかしあの用心深い村長が自分に何かを教えてくれるような真似を果たしてするだろうか。

Kはまた頭の中で策略を紡ぎ出そうとしていた。

自室へ帰ったKは家に帰ったような手持ち無沙汰の助手二人に腰をもませ、それが終わったら酒を少し持つてくるように指示した。今日はもう大してやれることもないから、早い時間に切り上げようと、Kが言ったのはこういうことであつた。

Kは夜に村の若い娘が酌をしてくれることもきちんと覚えていたが、酒を飲む手が止まらなかった。Kはまだ月も昇らない時間に、助手達が飲む分にまで手をつけてしまっていた。助手達はそれに悲しそうな顔を浮かべたものの、Kには逆らえなかった。

生き血を嚙る、贖罪の子は踊れ 7

村の娘が部屋にやってくると、Kは助手達を村長のいる居間に移動させた。これは後々になって明かされることとなるが、この時、Kの内に品のない思惑があったわけではない。むしろKの頭の中はすっきりと晴れ渡っていた。見かけほど酔っていないかった。

助手達は気の毒そうな目で村の娘を見やると、そのまま静かにKの部屋を出て行った。娘は若く、そして田舎の娘にしてはいくらか上品にも見えた。Kがじつと娘を見つめていると、娘は顔を極端に赤くした。Kは御盆を置いてそばに座るよう指示した。

「何も恐れることはないさ」と、Kは優しい口調で言った。すると娘はKとは目を合わさず、震えた声で「何も恐れてなどいやしませんわ」と、言った。

「なら酌をしてもらおうか」

Kがお猪口を向けると、娘は黙って酒を注いだ。Kは一度お猪口の中の酒の匂いをくんくんと嗅ぎ、それから一口で飲んだ。Kは反対に今度は娘に酒を勧めた。

「けっこうですわ。私お酒は飲めませんもの」

「君は村の娘と聞いたがどこの娘なんだい」

「川べりに近い百姓の娘にございます」

「ほう」と、興味深そうにKは言った。「ではもちろんあの川のことを知っているんだらうね」

「ええ、知っています。子供のころは川でよく遊びましたわ」

「じゃああそこが縁起の良くない場所だということも知っているんだね」

「それは村の人たちの思い過ごしですわ」と、娘はまたKから目を逸らしてうつむけた。「あなた様はご存知にならないかもしれませんが、この村には奇怪な伝説がございますの。それで水辺が恐れられるんですわ」

「できればそれを教えてくれないか」

「ええ、わかりました。ただし、あまり私がこのようなことを言っていたとは他言なさらないでください」

「わかつてるよ」と、Kは言った。

「昔、あの川に身投げをした女がおりました。私と同じような百姓の娘です。彼女は偉い様のご長男とたびたび逢引をしておりまして、やがて二人は子を作りました。しかしご長男はいいなずけのあった人ですから、ご両親がこれを許すわけにはいかなかったのです。そしてご両親は女にどこか遠くの町で暮らすように言いつけました。それができなければ女の両親もこの村から追い出すと脅したのです。次の晩、女は川に身投げをしました。……ですからこの伝説が誇張されてみな、ああして川を恐れるのです」

「それは本当にあつたことなのかい」と、Kが訊いた。

Kはこの話にぞつとして、空になつたお猪口を自分がまだ手に持ったままでいることにも気づかなかつた。

「本当ですとも。なにせこの家がそのご長男のご子息のおうちであるのですから」

「ということは村長がそのご長男というわけなのかい」

「それは違います。あの人は立派な尊敬できるお方です」

「とんでもない話だ」と、Kは改めてつぶやいた。「じゃあなぜ君は川を恐れないんだ。おれだって今までは村の人間を馬鹿にしていたが、話を聞いてわかつたさ。村の人間があつた川を嫌うのも無理はない」

「だって私は長いあいだあそこにいて、そんな女の霊など見たことがありませんもの」

Kは息を落ち着かせると、ようやく空のお猪口に気がついて、娘に酌をさせた。

「君の名はなんというんだ」

「お初にございます」と、娘はうやうやしく頭を下げた。

「お初、じゃあ早速おれの尋ねることに答えてくれ。いったいこ

この村は何を隠している。特に村長が何を隠しているのかが知りた
い。この村の人間はおれという救世主がやってきたにもかかわらず、
誰も何も言いにこない。村長が飯を運んでくるくらいだ」

「何も隠してやいません」と、きつぱりと娘は言った。

Kはしばらく娘の目の色を窺っていた。しかしこの娘が嘘を言う
とは思えなかった。

「ならこうしよう。ここにいるあいだ、この村にいるあいだは君
をおれの暫定夫人とする。君は毎晩ここへおれを訪ねにやってくる
んだ」

「急に何をおっしゃいますの」と、娘が顔を赤らめた。「私はあ
なた様の妻になどなれやしません」

「いいんだ。村長にはおれがそう言っていたと伝えていい。どう
やら君は村のこともそれなりにではあるが知っているようだし、悪
い人間じゃない。何もしやしないさ。おれはこう見えて自分が高潔
な人間だと思っているつもりだよ」

「わかりましたわ。ただし父が駄目と言ったらあととはわかりませ
んよ」

「いいさ。その時は君の父親をおれが説得する」

生き血を啜る、贖罪の子は踊れ 8

ひとしきり話が終わってしまつと、Kは何か思案にふけるように黙つて酒を飲んでいたが、やがて外が騒がしくなっていることに気づいた。どこから男の声が聞こえ、窓の外には軒からの明かりがぼつぼつと見受けられた。娘はこれに小さい悲鳴を上げた。何だどうしたんだ、とKが訊いたが、娘はそれに答えられなかった。ただじつと部屋の壁を見て、唇を震わせていた。

「お初、何がどうしたのかおれに言つてくれ」と、Kも必死になつて問いただした。

「またきつと出たんですわ」

「何がだ」

「鬼です。餓鬼に違いありませんわ」

「なんだと！」

Kはこう叫ぶと、あわてて立ち上がった。すぐに廊下から誰かの足早に歩く音が聞こえた。それは村長と二人の助手だった。三人はKの酒の場を邪魔したことに謝る余裕も見せずに、「鬼です、先生！」と、大声で叫んだ。Kは一瞬これに面食らい、困惑したが、すぐさま刀を持つて三人に連れられるまま外へ飛び出した。

村は概ね混乱の様相を呈していた。どこかで納屋が火を上げ、子供のいる母親達は子供達を抱えて家の隅に引きこもっていた。村長と助手達の走る後を追ひ、Kは長ドスを鞘から引き抜いた。それは闇夜の中で月のように艶かしく光り、Kは刀身に自分の当惑しきつた顔を見た。まだ時機があまりにも早すぎたため、Kに餓鬼を退治できる余裕は毛ほどもなかった。しかしこの事態にK以外の誰が対処できるというのだらう。Kは口惜しくなった。

「あれです！」と、又一が叫んだ。「あれに違いありません」

それは巨大な影だった。納屋につけられた火によつて餓鬼の影が

地面におおよそ大人10人もの影を作っていた。それから「いだだぎまあず」と、低くうなるような、獣数十頭の雄叫びにも似た声があると、断末魔のちに水つばい音が響いた。それは子供達が水辺で走り回ってはしゃぐ音にも似ていた。三人は立ち止まり、恐怖におののいて、もう前へ足を進めることができなくなってしまうていた。Kは無我夢中で助手のひとり突き飛ばし、納屋の裏側で起っている光景に目を疑った。

餓鬼は人を喰らいながら至福の笑みを浮かべ、血まみれになりながら死体を貪っていた。餓鬼の体に表皮と見られるものはなく、全体が肉の赤に染まり、さらにその上に血しぶきが飛び散っていた。腐肉がついているためにとろどろで骨が飛び出し、中でも、背骨は肉を突き破って頭の裏側まで突き抜けていた。

Kはもう何も考えられなくなっていた。これほどまでに尋常でないことが起きるとはつゆにも思わなかった。それは陰惨を、常識を越えた光景だった。今までどんな恐怖に相対しようとも、恐怖で足の動かなかったことなど一度もない。Kは体中に生ぬるい汗を掻き、ひたすら自分が鬼の標的にならないことを無意識のうちに望んだ。自分の持っているこの細身の剣で、こんな化け物を退治できるはずがない。

運のいいことに、餓鬼はKがそばにいることに気づきもしなかった。村民の死骸を骨と血に変えてしまったあとで、餓鬼は大きなげつぷをした。それからふたたび、低くうなるような声で「ごぞうざまでぢだあ」と言って、それまで前かがみになって食していた亡骸を前にのっそりと立ち上がった。鬼が立ち上がると、これまで目にしていた影は倍にも大きくなった。餓鬼の体は、立ち上がると人の四倍から五倍に見えた。

そのとき、立ち上がった拍子に、鬼のただれた目がKを捉えた。しかし餓鬼はもう食に興味を失ってしまったらしく、どこか別の方角へ向かってどすんどすんと歩き出してしまった。それはがに股で足を片方ずつ地面に落としていくため、遠くからでは踊っているよ

うにも見えた。Kはここで正気を取り戻し、後ろの村長らに叫んだ。

「あれはどこに行くんだ！ どこに向かつてるんだ！」

しかし三人は何も答えられなかった。それどころか、鬼に気づかれまいとするばかりに、Kが大声を出したのを迷惑そうに見つめているだけであった。Kはそれにいら立って何事か自分でもよくわからない言葉を叫び、手に持っていた長ドスを地面に叩きつけた。燃え続ける納屋の裏側では、地面のしみと化した人の赤黒い姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0064b/>

暗鬼夜行

2010年10月14日17時39分発行